

原発は人を養ひ―故郷と原発― 大口玲子

私が暮らす宮崎県の最南端には、原発立地計画があつた。野生馬で有名な都井岬のある串間市である。しかし四年前、原発誘致の是非を問う住民投票の直前に東日本大震災が発生し、投票は見送られて事実上の計画中止となつた。串間に住む若い友人の「原発ができれば就職先も増えて若者が地元に残るし、施設も色々できて地元が賑やかになると震災前は思つていました」という切実な言葉が忘れられない。また、熱心に反原発の活動をしている定年間の友人は九電社員だったが「電力の社員としてではなく、串間市民として原発に反対したい」と言つて、串間市内に転居して家を建ててしまった。彼の言葉の意味を改めて考えている。

- ・ 原発は人を養ひ、しかすがに燃ゆる火芯は人を蔑すも
- ・ 海べりにこつそり生きて黙深し五十余頭の白マンモスは
- ・ 原発は心肺停止して死なず死ぬためになほ血をながしをり

昨年刊行された高野公彦の第十六歌集『流木』には、原発やそのシステムのいかがわしさ、しぶとさ、また事故を起こした原発のなまなましいイメージが繰り返し歌われている。鈴木竹志の『高野公彦の歌世界』には「原発の歌」という項があり、高野が第三歌集『淡青』の頃から三十年以上にわたつて原発の歌を詠み続けていることを丁寧に検証している。高野がもつとも早く原発を詠んだのは一九七七年、同年に高野の故郷である愛媛県の伊方原発

一号機の運転が開始されていることを鈴木は指摘している。

・ 青海に伊方原発迫れるを峠より見て言葉は絶えつ 『淡青』

・ 五月の日にわたりけり峠路の北の原発に南の漁村に 『淡青』

高野の原発の歌として「原子炉のどろ火で焚いたももいろの電気、わが家のテレビをともす」（『水行』）「やはらかきふるき日本の言葉もて原発かぞふひい、ふう、みい、よ」（『天泣』）がよく挙げられるが、右の二首を読むと、高野が原発の歌を詠み始めたその出発点には、放射能汚染などの懸念以前に、故郷の海に無遠慮に立ち入り、故郷の風景を冒瀆する圧倒的な存在に對す違和感と脅えがあつたことがわかる。

・ 風いでて波止の自転車倒れゆけりかなたまばゆき速水の海 『水木』

・ 遍路路を照らして音もなく青き空海のそら、一遍のそら 『雨月』

・ 家失せてふるさと遠しふるさとの光し恋し蜘蛛の網の光 『流木』

広い海と空、まばゆい光、静けさと安らぎ――高野の故郷に對するイメージは、その始まりから現在に至るまで、明るくまぶしい。高野にとつて原発は、それらと真つ向から対立するものだった。海が近い、地盤が固い、周囲に人口密集地がないなど、原発立地の条件を考えると、原発建設のために選ばれてきたのは、まさにそのような日本の「故郷」ばかりであつたことを改めて思う。

・ ふるさとは汽水光れども我は行くこと無けむ墓入り以外

・ 居酒屋で原発のことけなしゐる爺さまがみたらそれが僕です

高校卒業後は愛媛を離れた高野の故郷との距離感は、そのまま原発との距離感ともなっている。どのような距離にあつても原発を歌い続けてきた高野の、静かな矜持が表れている歌集である。